

摂食嚥下機能障害支援実習

Training of Dysphagia Rehabilitation

キーワード

- ① 全身管理医歯学
- ② 全身管理高齢者歯科学
- ③ 摂食嚥下スクリーニングテスト
- ④ 嚥下内視鏡検査
- ⑤ 摂食嚥下機能訓練

授業概要

脳卒中等による要介護高齢者および発達障害児・者では、摂食嚥下障害は誤嚥性肺炎の主因となり生命予後にも大きく影響するため、専門的支援を行うことが重要である。本実習では、摂食嚥下機能障害を理解し、支援に関する専門的な知識・態度・技能を修得することを目標とする。特に摂食嚥下機能障害に関する基本的な病態を解説し、実習を通して検査、訓練および関連する専門的内容を修得する。さらに、発達障害児・者に特有の摂食嚥下機能障害の病態を解説し、実習を通して検査、訓練および関連する専門的内容を修得する。

授業科目の学修目標

社会の高齢化に伴い、脳卒中や神経筋疾患を原因とした摂食嚥下障害患者が急増しており、幅広い摂食嚥下障害患者へ対応できる歯科医師の育成は重要である。本実習を通して摂食嚥下機能障害患者支援に必要な知識・態度・技能を包括的に習得する事を目標とする。

授業計画

- ① 摂食嚥下機能障害支援計画立案実習 24コマ
実習を通じて障害発見能力を育成すると同時に、摂食嚥下障害に対する治療計画立案の基本を教授する。また、高齢者の摂食嚥下障害と発達期の摂食嚥下障害のそれぞれにおける支援計画の特性についても触れてゆく。
- ② 摂食嚥下スクリーニングテスト実習 12コマ
反復唾液嚥下検査、改訂水飲み検査などのスクリーニングテストについて手技や科学的根拠を教授する。
- ③ 内視鏡を用いた摂食嚥下機能評価実習 12コマ
嚥下内視鏡検査の方法や注意すべき項目、支援への応用方法について教授する。
- ④ 摂食嚥下機能訓練実習 12コマ
評価の結果に基づき、行うべき訓練やその他の対応について教授する。

実習担当教員 森本佳成 小松知子 飯田貴俊 赤坂徹 林恵美 高城大輔

教科書および参考書

摂食嚥下リハビリテーション 第3版、医歯薬出版、才藤栄一、植田耕一郎監修

履修に必要な予備知識や技能、および一般的な注意

実習の前には、評価手順を指導教員に確認し、また教科書で理論を熟読してから実習に臨むこと。

大学院生が達成すべき行動目標

- ① 摂食嚥下障害患者の問題点を把握し、治療計画の立案することができる。
- ② 摂食嚥下スクリーニングテストの理論を理解し実践することができる。
- ③ 嚥下内視鏡検査を用いた摂食嚥下障害の評価の理論を理解し実践することができる。
- ④ 評価をもとに、実際に摂食嚥下訓練や指導を実践することができる。

評価

試験	小テスト	レポート	成果発表	ポートフォリオ	口頭試問	実技	その他
20%	0%	40%	0%	0%	0%	40%	0%

評価の要点

- ・試験は授業計画で行った実習の知識の理解度を判定する。1回20%
- ・レポートは、授業計画の4項目について課題を提出する 10%×4回=40%
- ・実技は、授業計画の4項目についてプロダクトおよび実技の達成度を判定する。10%×4回=40%

理想的な達成レベルの目安

摂食嚥下機能障害支援実習の理想的な達成レベルは70%以上とする。